

「**目撃者イエスの弟子**」 使徒言行録 1 : 3 ~ 8

## I 導入部

おはようございます。5月の第四日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

昨日は、長女の結婚式がありました。皆様にはお祈りをさせていただき心から感謝致します。また、参列して下さった方々にも感謝致します。ユースの賛美、本当にすばらしかったです。私は花嫁の父ですが、牧師という立場で司式もさせていただきました。15分という短い時間の結婚式でしたが、それはそれなりに良かったかなと思います。披露宴も、温かな雰囲気良かったです。親は、挨拶やなんやかんやで、気を使いますね。神様の見守りと皆さんのお祈りのおかげで、結婚式、披露宴が守られました。感謝致します。

私たちは、信仰生活の中で、私たちの思いと神様の思いの違いを経験します。聖書にもその違いが記されています。神様のみ心を知ることはなかなか難しい事ですが、私たちは、聖書を通して、神様のお心を知ることができます。

今日は、使徒言行録 1 章 3 節から 8 節を通して、弟子たちの思いとイエス様の思いとの間には違いがありますが、「**目撃者イエスの弟子**」という題でお話し致します。

## II 本論部

### 一、とどまり待つことの大切さ

イエス様が十字架にかけられて死なれたことは、弟子たちにとっては大きな悲しみと痛みでありました。そして、イエス様が復活されて弟子たちの間に現れましたが、弟子たちは、なかなか信じることができないでいたことを聖書は記しています。不信仰な弟子たちでしたが、イエス様が何度か、よみがえられたご自身の身体を見せて下さり、弟子たちはイエス様がよみがえられたことを信じて喜ぶことができたのです。

人間の最大の恐れ、悲しみである死を打ち破られて、よみがえられたイエス様の姿は、弟子たちにとっては、かつてのイエス様の奇跡にも驚きましたが、復活という事実は衝撃的で、弟子たちにとっては、大きな期待が膨らんでいたことだと思うのです。

イエス様は、復活されて 40 日間、数多くの証拠を弟子たちに示し、弟子たちに現れたと 3 節は語ります。イエス様は、弟子たちに、「神の国」について話されました。神の国とは、神様が支配される国ということでしょう。今や死を打ち破り、神様の支配が及ぶ世界について話されたのです。神の支配とは、イエス様の十字架と復活を通して与えられる神の支配、死を打ち破られた神の支配、そして、神の恵みの支配、神の赦しの支配だと思うのです。よみがえられたイエス様を見るたびに、弟子たちは、早く行動を起こしたい、何

かをしたいという思いがあって、じっとしておれなかったのでしょうか。そのような弟子たちの様子を見て、イエス様は語られるのです。4節を共に読みましょう。「そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。」

エルサレムという場所は、イエス様が十字架にかかり、よみがえられた場所です。しかし、エルサレムは弟子たちが、十字架を前にしてイエス様を見捨てた場所、失敗をした場所でもあり、できることなら離れたい、と願っていたのかも知れません。

マルコ5章に出てくるゲラサ人の地方で、汚れた霊につかれていた人は、墓場に住み、大声を張り上げ、鎖や足かせをされても引きちぎるといふ危険な人物でした。しかし、彼はイエス様に癒され、救われました。そして、イエス様について行きたいと願いましたが、イエス様は、自分の家に帰り、イエス様がなして下さったことを語るようにと言われたのです。彼にとって、その場所に残るといふ事は、自分の過去の汚点やひどい事柄を知っている人の所にとどまることは辛い事です。しかし、彼がそこに残らなければ、イエス様の事を伝える人は誰もいなかったのです。そして、彼はイエス様に救われたことを多くの人に話したのです。そして、人々は神様をほめたたえたのです。

イエス様は、弟子たちに、良い思い出のないエルサレムに留まるように命じられました。それは、イエス様が約束された聖霊をいただくためであったのです。これからの弟子たちの働きのためには、どうしてもこの約束の聖霊が必要だったのです。そして、私たちにも聖霊が必要なのです。今置かれた場所が辛い場所かも知れません。しかし、そこにとどまり、イエス様を信頼する時、聖霊が私たちを守り、恵みの場所として下さるのです。

## 二、神様の時が必ず来る

イエス様は、続けて5節では、「ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられるからである。」と言われました。イエス様を信じて受ける救いの洗礼ではなく、神様の約束である聖霊による洗礼を受けると約束されたのです。そのような約束が与えられていることを弟子たちは喜んだでしょう。イエス様はそばにいるし、聖霊が与えられるという約束もいただいて、弟子たちは大きな勇気をもったのでしょうか。

6節のような質問が出てきたのです。「さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。」かつての、イエス様の力ある言葉や奇跡のみ業を見て弟子たちは、驚き、イエス様の弟子であることを喜んだ。誇りました。しかし、イエス様の十字架の死で、自分たちの期待が裏切られたという挫折も経験しましたが、イエス様がよみがえることにより、また、彼らには期待が高まったのです。「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と。

「イスラエルのために国を建て直す」とは、旧約聖書に預言されたメシア、救い主が現れる時に実現すると期待されていた救いやみ業のことでしょう。ユダヤ人は、長い歴史の中で、苦しみ、もがいておりました。しかし、メシア預言という望みを持ちつつ、苦しみや悲しみの中でも、メシアの出現とイスラエルの復興を心から待ち望んでいたのです。ユダヤ人である弟子たちは、長い間、国を失い、外国の諸国に支配されていたイスラエルが、

救い主の出現、現にイエス様を目の当たりにして、イエス様の力で、イスラエルの力を盛り返して、外国の、敵の支配から解放されて、自分たちの国、イスラエル、メシアの王国、神の国を確立することを待ち望んでいたものですから、復活を通して、イエス様のさらなる力に期待して、イスラエルの復興が、今ではないかとイエス様に尋ねたのです。「今でしょ！」ということです。しかし、イエス様の考えは違いました。7節には、「**イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。」**」6節で弟子たちが言った「この時」の「時」と、イエス様が言われた「時や時期」の「時」には、違いがあるようです。聖書では、ギリシャ語では、時を現すのには2つの言葉があるといわれています。1つは、「クロノス」という言葉で、時計の針が1秒ごとに同じ速さで進んでいくような連続した時間を現すようです。もう一つは、「カイロス」という言葉で、神の力が人間の世界に介入する時、決定的な時間、神の時を現しています。

イエス様は、神の時、神様が介入する圧倒的な時を知ることはできないのだから、待つことを示されたのです。私たちも、「早く助けてほしい。祈りに答えてほしい」と自分の思いで、「いつなのですか？」と聞いてしまいますが、神様の愛と力が、私たちに示して下さる時が、あることを信じて、イエス様に期待したいのです。

### 三、イエス様の証人として生きる

弟子たちは、復活されたイエス様にどこまでも期待しました。それはそうでしょう。死んでよみがえるということの神の力を近くで見たのですから。しかし、神様の業は、イエス様の復活では終わらないのです。弟子たちは、イスラエルの復興について考えていましたが、神様の思いはイスラエルにとどまらないのです。1章8節を共に読みましょう。

**「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」**

イエス様は、エルサレムにとどまって、イエス様が約束されたもの、聖霊が与えられることを待つように、それは聖霊のバプテスマであることを示された上で、その聖霊が弟子たちの上に降ると弟子たちが力を受けると約束されました。この力とは、人間的に元気になるとか、強くなるとか、というものではなく、イエス様と同じ人格を持ち、イエス様の教えたことを悟らせ、慰め、癒し、強め、励まして下さるお方なのです。イエス様の証人として、力強く証しする人となるということなのです。イエス様ご自身が、「**わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。」**」(ヨハネ16:7)と言われた聖霊なのです。

弟子たちは、復活されてさらなる力がアップされたイエス様、目に言えるイエス様とのイスラエル復興を考えましたが、イエス様は、ご自分は去って行くことにより、弁護者、助け主、聖霊が与えられ、その聖霊が弟子たちを強め、証人として遣わすのだ、と言われたのです。そして、その復興は、イスラエルだけではなく、ユダヤとサマリアの全土、地の果てに至るまで及ぶ、神の様の力を示しているのです。

イエス様の思いとは、弟子たちが言うようなイスラエルの復興ではなく、イエス様のこ

とを宣べ伝える証人、証し人たちが起こされることなのです。証し人が起こされるという事は、教会が立てあげられていくということなのです。そして、教会の成立は、弟子たちの上に、聖霊が降ることによって実現していくのです。この1章8節の言葉は、ペンテコステになされる教会の誕生の予告とも言えます。イエス様の十字架、復活、昇天によって実現していくのです。イエス様の、神様のおこころは、イスラエルのための復興ではなく、聖霊によってなされる教会の誕生だったのです。

聖霊が降ること、教会が誕生するということは、目に見えるイエス様が共にいるというより、聖霊によって力を受けた弟子たちが、イエス様の力強い証人として遣わされていくことが、すなわち、イスラエルの復興となるのだと思うのです。

証人というのは、そこにいない人を証しするということでしょう。その人の、つまり目に見えないけれども、イエス様が語られた言葉や行われた業、イエス様によってなされた救いのみ業を証しする人なのです。目に見えないイエス様が共におられるということは、聖霊が証しするのです。弟子たちは、イエス様の十字架と復活、その他のみ業や権威ある言葉の目撃者であり、証人となっていく人々なのです。

### Ⅲ 結論部

弟子たちにとって、復活されたイエス様が40日間共におられたという事は大きな慰めであり、励ましでした。力でした。だからこそ、イエス様を中心としたイスラエルの復興を願いました。しかし、イエス様は、弟子たちがイエス様の業の目撃者であり、イエス様の証人として遣わされていくのです。証人という言葉は、殉教者を意味する言葉だと言われています。あの弱々しい弟子たち、イエス様を一人残して逃げて行った弟子たち、イエス様のそばにいたらこの世的に良い地位につけると自分の事しか考えなかった弟子たちが、イエス様のご命令によって、エルサレムに留まり、聖霊が降ることによって、力を受ける。圧倒的な、ダイナマイトのような力を受けることによって、自分の命を守るのではなく、イエス様のために、イエス様を伝えるために、イエス様の証人として、命を懸けるまでに変えられていくのです。それは、弟子たちの頑張りでも、優秀さでもなく、人間的な努力や力ではなく、聖霊による油注ぎ、聖霊による洗礼を受けるからなのです。

私達も弟子たちと同様、弱い者です。自分が一番です。自分中心です。弟子たちと何ら変わらない者です。しかし、弟子たちが、エルサレムにとどまり、イエス様の約束を待ち、祈り備え、そこに聖霊が降るように、私達には、イエス様の約束である聖霊をいただいています。私達の内に聖霊がおられるのです。私達も、日本という社会の中で、クリスチャンが少ない中で、弱小クリスチャン軍団ですが、聖霊をいただいているのですから、聖霊に満たされて、私達もイエス様の証人として、ここから遣わされていきたいと思うのです。大丈夫。聖霊を通してイエス様は共におられます。イエス様はあなたと共におられて、あなたを支え、励まし、強めて下さるのです。この週も、共におられるイエス様を信じて、聖霊に信頼して歩んでまいりましょう。